

2014.11.29 図書新聞『学術』掲載分

ハーバーマース流とは 全く異なる系譜のメディア論

伝達とは何かという大きな問いに至り、それに答えることを試みる。

繩田雄二

ヤミンの言語論は一種のメテイア論であるが、神の言語と人間の言語の区別を強調する。完璧な創造性を帯びた神の言語に対し、隕罪を経た間の言語は差異に封印されてゐるというのだ。

あるいはジョン・ダラム、ピータース。一者の精神状態と他者の精神状態が「ミニミニケーション」による合一する、という理想をピータースは放棄している。彼において「ミニミニケーション」は、たまゆらにからだが触れ合う踊りのようなものだ。

ベルリン自由大学教授としてドイツ語圏の哲学界に重きを

余りアーチを繰り返して行われるのは、人人が相互にコミュニケーションを取る。しかし、これは、かねてよりメディア論が押した、意旨を宣とするメディア論はまだに信者が多い。しかしながら、ネット上からしばしば次々と携帯電話による犯罪が横行する世の中で、これを素朴に信じるのは難しい。

メディア論、コミュニケーション論は、ハーバーマー（例えば天使という使者は神との懸隔あってこそ存在する）のメディア現象の根底に

問い合わせにつなげるためだといふ。自律する主体ではない、他者が「自己理解する」といふのが見做すことはいかない。任務を負う存在として人間が「自己理解する」といふのが見做され得た。本書も形而上学の書であるから、読みやすくなはない。読者は、メディア哲学という様態の言説のなかに入りこまねばならない。西洋哲學があらゆる意義について真理を告げうる普遍的言説であるとの仮面は、二一チエがはき取った。日本でも木田元が「反哲學」を標してその論識を広めた。メディアについて論ずる言説の様態が多様であることもわかれは知っている。そのなかで「メディア哲學」を読む必然性を読者はまず見つけねばならない。クローバルでしかも地域差の大きいメディアという現象についての、ヨーロッパの地方色豊かな書物を、日本でどう受け止めるか。読者は本を手に取るや否や、この問いに直面する。別の言い方をすれば、この本は、全く違う言語圏に出ることによって、こうした問いの試験を受けている。

いや、として、いかなるメディアがどのよし」という具體論が、メディア論の王道であり続けてきた。マクルーハンのメディア論も、具体的であればこそ、さあまさ文化圏の読者が接続点を見出しあく歓容され得た。本書も形而上学を展開した上で、巻き

地图に具体的なメディアの例に適用している。天使論の隠し味のあるメディア論として哲学市場で消費されてしまい、とならないためにも、本書の主張の具体例に即しての検証は、さらに必要である。それはクレーマー自身が行うかもしれない（彼女の自著「可算的理性」は具体的なメディア論のみならぬ結果であった）。本書の読者もまた、検証作業に説かれている。

シークリット・ヴァイケル・ベルンハルト・シーゲルトルディツの人文科学を現在語にする大家の論が要所要所で引用され、読みこなしていく。ドイツのどこかのシンボジウムでクレーマーが発表し参加者と自由に議論しているのに耳を傾けているのがよだ。クレーマーが日本で行ったゼミナールが機縁となつて本書を訳したのは、京都大学出身の宇和川雄、勝山祐子、川島隆、永畠紗織の諸氏。京都——ベルリンの繩上でこれから面白い学問が生まれるかもしれない。